

1920年代イギリスにおける保育学校 教員養成カリキュラムの特質と意義

長崎女子短期大学 中 嶋 一 恵

ABSTRACT

The Characteristic and Significance of the Training Curriculum
of Nursery School Teachers in England in the 1920's

Kazue NAKASHIMA
Nagasaki Women's Junior College

The aim of this paper is to clarify the characteristic of training of nursery school teachers, and to find the property of nursery schools in England in the 1920's.

By means of comparison with curriculum of training colleges, it was clear that training of nursery school teachers had two characteristics.

① Training colleges laid stress on practical training.

Curriculums of some training colleges required, with suggestion from Nursery School Association, practical works in nursery schools, hospitals and clinics, and visits to special schools, parents' clubs and children's homes. The reason that colleges had importance of practical training was nursery school teachers had to deal with young children.

② Training colleges made curriculum on the basis of the actual conditions of children in nursery schools.

Most of children in nursery schools belonged to the poor, on the other hand most of training college students were from lower middle class. Therefore, students needed to know the actual condition of children and their background, in addition to studying the other basic subjects. Moreover, they were strongly encouraged to take interest in social problems and community.

These characteristics mentioned above clarified that nursery schools had to be not only educational institutions but also child welfare institutions.

I 課 題 設 定

現在日本の学校では、不登校や学級崩壊などといった問題が深刻化し、学校における教員の教育力が問われている。こうした状況に対応するために、教職課程のカリキュラムの改訂が行われ、教職科目に重点をおいた内容に変更された。これは、幼児教育施設である幼稚園の教職課程でも同じように

実施され、教職に関する科目が増加するとともに、問題を総合的に捉える力を養えるように演習科目も増加した。このように、現場と養成校の関係は密接であり、現場の状況の変化に応じてそれに対応できる教員が養成されることは必然のことである。

こうした日本の状況を考えるとき、一連のイギリス保育学校運動に関する研究を継続するにあたって、現場と養成校の関係を教員養成カリキュラムにおいて捉えてみることは、その当時の保育学校の状況を理解する上で、また、運動の方向性を明確にする上でも意義のあることといえる。

そのために、本論文では1920年代を分析の時期とする。それは、1918年教育法(Education Act 1918)によって保育学校が公教育施設と規定されたこと、保育学校教員の養成を開始する学校が出てきたこと、保育学校普及活動の中心的役割を担った保育学校協会(Nursery School Association)が1923年に発足したことなどから、この時期にイギリスの保育学校の教育施設としての基盤の整備が開始されたと考えるからである。

そして、保育学校教員養成のカリキュラムに焦点をしばり、その比較分析を行なう。それは、カリキュラムに焦点をあてた先行研究がみあたらないこと、また、カリキュラムに学校関係者の教育観や保育学校観、現場のニーズへの配慮など、保育学校運動の方向性を導く重要な要素を読み取ることが可能であると考えからである。すなわち、本論文ではカリキュラムの特質と意義を明らかにし、そこに反映されている当時の保育学校の性格を描き出すことを課題とする。

II 保育学校規程にみられる保育学校教員の資質

1918年教育法は、保育学校について規定した初めての法律で、保育学校を2歳以上5歳未満の幼児を対象とした公教育施設として認め、地方教育当局にその設置任意権を与えたものである。この法律により、保育学校は、急速に設置・普及されることが期待され、実際に、1919年の保育学校規程(Regulations for Nursery Schools)に基づいて、認可を受け補助金を得た学校も数校出はじめた。そして、この普及の期待から、質のよい保育学校教員が養成されることも必然となったのである。

この教員に関して、保育学校規程の中では、保育学校は教育院(Board of Education)によって承認された有能な校長の管理下で、適切な人数の質の高いスタッフをそろえることが求められている。そして、規程の前文では、保育学校に必要なスタッフとその資質が具体的に提示されている。すなわち、保育学校のスタッフは、校長、成人アシスタント(Adult Assistants)と看護婦、実習生(Probationers)で、彼らに求められる資質は以下のとおりである。

校長は、保育学校の要であり、子どもの衛生について十分な知識を持ち、子どもの身体の健康(the physical welfare)に責任を持つ能力が必要とされるとともに、広い視野や想像力をもって子どもを指導することが求められている。そのため、教員養成カレッジなどで、特別訓練コースを受講することが望ましい。そして、その下で働く成人アシスタントは、看護(nursing)の資格を持っていて幼児の身体の健康を担当する女性と、幼児を訓練したり指導したりする資格や実践経験を持つ女性で構成される必要がある。また、毎日保育学校を訪問する、資格を持った看護婦も必要である。さらに、将来保育学校で職につくために実践を行う実習生も受け入れることが求められる。ただし、実習生を安価な労働力とみなすべきではなく、彼らが16歳まで十分な教育を受けていないならば、補習クラスへ出席させるよう配慮する必要がある¹⁾。

このように、保育学校規程では、保育学校の特徴である子どもを身体的側面からケアする機能と、教育的側面から指導する機能を果たすスタッフがそれぞれ必要であることが規定されていた。そして、実習生も保育学校のスタッフとして捉えており、実習の意義の大きさを認識し、実践に重点をおいた教員養成を意図していたことが窺える。しかし、保育学校に必要な教員の人数や、保育学校教員の養成形態についての具体的な規定はなされていなかった。そのため、第一次大戦後、イギリス財政が逼迫し、「ゲッディスの斧 (The Geddes Axe)」と呼ばれた政府の経費節減政策が実施され、法律の保障する最低ラインまで地方当局の財政が切り詰められた時には、1918年教育法で地方教育当局の権限とされた多くの改革や、教育関係施設・人員の増加と同様、保育学校に関する条項の実施は消極的になってしまったのである²⁾。

その後、こうした状況ではあったが、1925年に教育院から回状 (Circular) が公布された。これは、上級中等教育修了資格 (Higher School Certificate) だけを持っている学生のために、専門的で実践的な授業内容で構成されている1年コースを提供することを規定していた。このことから、当時教育院がアカデミックな内容よりも、専門的な内容で教員養成を行うことを重視していたことが窺え³⁾、保育学校教員養成もその傾向にあったといえる。

III 保育学校協会の活動と教員養成

前述のような状況のもと、1923年にマーガレット・マクミラン (Margaret McMillan) を会長に保育学校協会が発足された。この協会は、保育学校の必要性を社会に認識させ、1918年教育法の実施を教育当局に要求することを目的に、積極的な活動を展開した⁴⁾。そして、その活動の中には、当然のことながら保育学校教員の養成に関する内容も含まれていた。

例えば、保育学校協会は、1926年に保健省 (Ministry of Health) に代表団を派遣し、討議を行う中で、1925年の回状についても話し、次のような見解を得ている。(1)教育院は、訓練を受けた有資格の教員だけを保育学校長として承認することを意図していること、(2)幼児80名につき1名の有資格教員が必要であるが、それは1つの保育学校に2名以上の有資格教員が必要であることは意味していないこと、(3)退職手当について、保育学校の有資格アシスタントが幼児学校の教員と同じ待遇をもらえるかどうか保証できないこと⁵⁾。

このような行政側の考えに対し、保育学校協会は、保育学校の普及と良質のケアと教育の提供のために、専門的な知識・技術を持つ有資格教員の存在が不可欠であることを主張している。

協会の名誉幹事で、マザー教員養成カレッジの校長であるグレース・オーエン (Grace Owen) は、1924年2月16日のタイムズ教育版に、子どもの性質や気質、姿質が形成される大切な時期である2歳以上5歳未満の幼児を扱うため、十分に訓練を受けた教員が必要だという記事を載せている。つまり、1918年教育法では、保育学校長は専門的な訓練を受けた人物であることが明記されていたが、アシスタントに関してはそれがなく、実際に資格を持っている人も少ない。そのため、保育学校には資格を持つアシスタントが最低1名と、看護の資格を持つヘルパーがいるべきであるという主張を行っているのである⁶⁾。

また、保育学校協会が1927年に作成したパンフレットには、保育学校のスタッフとして、専門的な訓練を受けた有資格教員が40名の子どもに対し1名以上必要であること、そしてその教員をケアの側

面から助力する人として、児童看護や病院看護、ソーシャルワークなどの訓練を受けてはいるが、資格は有さないヘルパーが40名の子どもに対し2名以上必要であることを記述している⁷⁾。

このように、保育学校協会側は、保育学校にも有資格教員が必要なことを社会へ向けて主張している。これは、保育学校教員という仕事が、専門的な知識や技術を必要とする専門職であると協会が考えていたことを示すものである。ただし、この主張は、保育学校教員全員が資格を有することを意図したものではないことに注目すべきであろう。これは、保育学校教員専門のコースを有する養成カリキュラムが当時数校しかなかったこと⁸⁾、また保育学校教員の仕事内容の特殊性から、現場での経験が重視されていたことに起因するものであると考えられる。

こうした考えのもと、保育学校協会は、1926年にパンフレットを作成し、保育学校の教員に必要な基準として、その教員養成に必要なカリキュラムの提案を行っている。それには、教育院による教員資格を取得するコースである二年コースと、資格をすでに持っている教員のための一年コースが設定されており、次のような内容で養成を行うことが提案されていた⁹⁾。

〔二年コース〕

1 教育学

a 理論

- ①児童学(child study)と心理学 ②教育原理 ③行政と組織
- ④教育史(地域における保育学校の位置付けも含む)

b 実践

- ①保育学校や幼児学校での実習 ②ほかの保育学校や特殊学校を訪問
- ③両親クラブや子どもの家庭の訪問

2 自然学

a 理論

- ①自然の学習や園芸をとおした生物学の概論

b 実践

- ①子どもの庭づくり

3 衛生学

a 理論

- ①解剖学、生理学の基礎 ②個人の衛生 (personal hygiene)
- ③幼児の健康的な成長や発達に必要な状況 ④感染症の広がりに関する学習 ⑤児童福祉活動

b 実践

- ①病院、診療所、外来患者部局、救急手当て部局などでの実習、公衆衛生施設 (Public Health Institution)の訪問

4 文学

a 一般教養

- ①演劇、詩、散文、神話、民俗学のいくらかを含むコース

b 専門

- ①児童文学、お話、劇化

5 スピーチトレーニング

- a 学生に対して
- b 子どもに対して 幼児を訓練する最良の手段の学習

6 音 楽

- a 一般教養
 - ①音楽の簡単な理論
 - ②音感訓練
 - ③歌唱
 - ④リトミック
 - ⑤音楽鑑賞（注：楽器の学習も含む）
- b 専 門
 - ①子どもの歌とリズム
 - ②唱歌ごっこ
 - ③子ども楽団

7 芸術と手工

- a 保育学校や庭に必要な物を作ったり修繕したりする実践を含む、手工の一般教養的なコース
- b 工芸あるいは素描・デザインのうちどちらかの専門学習
- c ①子どもに適した作業の学習 ②お話のイラスト、記憶の素描（memory drawing）
③印刷（printing） ④子どもの上着づくりと幼児のための調理

〔1年コース〕

これは、個々の学生のニーズにあわせた内容で、保育学校や社会的教育的施設の訪問などが奨励される。そして、社会問題を理解する観点をもつために、保健婦や医者、工場視察官（Factory Inspectors）などの他分野の人々とのミーティングの機会を提供する。さらに、家庭や外国への教育ツアーも計画される。

1 心理学と教育学

- a 心理学の上級コース、保健心理学（Psychology of Health）、遅進児や知的障害児などについての専門学習、幼児期における宗教
- b 上級の教育史と教育行政
- c 社会教育、両親クラブ、他団体との協力、会話の訓練
- d 若い教員を監督するための実践

2 衛 生 学

- a 生理学と児童衛生、あるいは生物学に関する学習
- b 育児法と家政学

3 選択コース

必要性や要求がある教科を学ぶ

このように、保育学校協会は、幼児教育に関わるすべての領域にわたって学べるような養成カリキュラムの提案を行い、保育学校教員の専門性を高める配慮を行った。それは、子どもの身体的発達と教育的指導の両面の知識技術を持ち実践経験もある、即戦力となる教員の養成を目指したものであったといえる。そして、地域における保育学校の位置付けを理解する授業や、両親クラブや家庭の訪問をすることなどの提案から、家庭や地域での生活環境を考慮しながら子どもの発達を保障するという、対象児の年齢などの理由から子どもの生活と密着せざるをえない、保育学校が有する教育の特色がここに窺えるのである。

IV 保育学校教員養成カリキュラムとその特色

当時保育学校教員の養成は、ほとんどが他の学校教員を養成するカレッジに付設されたコースで行われていた。そのため、そのカリキュラムは、カレッジの教育方針に基づき、フレーベル主義やモンテッソーリ法を採用するなど多様であった。この中で、レイチェル・マクミラン教員養成センター (Rachel McMillan Training Centre) も、独自の教育方針で教員養成を行っていた。

ここは、1919年にロンドンのストウエイジに保育学校協会の会長であるマクミランが開校した養成学校であるが¹⁰、他の養成校とは異なり彼女の教育方針から、保育学校教員のみを養成する小規模な学校であった。そして、講義と実践を直結して学ぶことができるだけでなく、子どもたちが生活している地域社会、家庭の状況も把握でき、それにより、一層子どもを理解できるようになるという理由から、養成学校を保育学校に付設し寮もその付近に設置した。つまり、保育学校教員には、地域社会の問題を分析し、それによる子どもへの影響を考え、母親と協力して子どもの健全な生活と身体的・精神的な発達を保障する能力が求められると彼女は考えていたのである¹¹。そのため、このカレッジのカリキュラムは、体育、音楽（ダンス、劇化、楽器）、フランス語会話、教授法、自然学、お話、幼児理解のための心理学、劇と関連した歴史、手工、芸術、園芸といった一般的な養成カリキュラムだけでなく、より実践的に、歯科訓練（歯科衛生の指導と実践）、クリニックでの子どもの病気に関する実践、清潔（子どもを風呂に入れること、髪や肌、歯、爪の手入れ）、ゲーム、おもちゃづくり（模型製作、図画、設計）、生理学、針仕事、洋裁、幼児のための調理と洗濯、子どもの観察、健康記録作成なども教えられた。そして、実践的な社会学の学習のために、子どもの家庭状況の分析やスラムの家や庭の設計なども行われた¹²。

こうしたカリキュラムは、マクミランの保育学校における実践から考え出されたものであり、スラム地域に所在したことによる特徴が表われていると思われる。例えば、実践主義で子どもと関わる機会を多く取り入れ、貧困家庭の子どもの実態を把握し、その対処の仕方を看護、衛生、教育、生活などの様々な側面から学べるように工夫がなされている。これは、保育学校の教員と子どもに階級差などによる大きな生活環境の違いがあり、それを実体験により理解することが必要であるとマクミランが考えていたことによるものである¹³。保育学校普及活動を積極的に推進したマクミランの学校であることと、その保育学校が当時のモデル校であったこと¹⁴を鑑みると、この学校のカリキュラムが他校へ与えた影響は少なくないといえる。その影響は、前述の保育学校協会により提案されたカリキュラムにも、また、マクミランが最初に保育学校を開いたデットフォードに近接していたゴールドスミスカレッジのカリキュラムにも見うけられるのである¹⁵。

普通課程

(i) 必修——国語, 教授法, 教授実践, 衛生学, 体育, 素描 (男性), 針仕事, 手工 (女性)

(ii) 選択

男性(a) 音楽あるいは手工

(b) 数学, 手工と関連する基礎科学, あるいは歴史, 地理

女性(a) 音楽, あるいは素描, 応用デザイン

(b) 幼児教員は自然学と, 歴史あるいは地理のうちどちらかを選択する。

ただし, (a)で音楽を選択しない場合は, 音楽の特別コースを選択すること。

(c) 幼児教員以外は, 歴史あるいは数学と地理, または自然学を選択すること。

高等課程は次の中から1科目選択する。

国語, 歴史, 数学, 地理, 素描, 音楽, 手工, 科学, 自然学

〔教育〕

I 教育のねらいと目的

II 行動と性格の学習

III 学習プロセス

IV 組織化されたコミュニティとしての学校

V カリキュラムの教科とアプローチ法

VI 教育史

VII 教育的観点からの社会科学

A デプトフォードの社会問題

B 学校生活の背景にある社会問題

C 社会衛生

VIII 子どもと学校衛生

IX 体育の理論

X 保育学校教員のためのコース

(理論保育学校に関する心理学, 衛生, 学校組織, 実践附属保育学校, 幼児学校の保育クラス, 保育所での実践, 放置の結果と病気の症状を実験するために児童福祉センターや児童病院へ出向くこと)

このような各養成カレッジのカリキュラムを比較してみると, 次のような特徴がみうけられる。

まず, 実習が多施設で行われることである。実習は, 保育学校においてだけでなく, 病院や福祉施設などの幼児に関連する施設でも行われた。前記のマクミランやゴールドスミス以外に, 例えばマザー教員養成カレッジでも, 小児病院での3ヶ月間の実習を行っている¹⁷⁾。こうした傾向は, 当時, 教育院によって教員養成における専門性が求められ, 実践・実技に重点がおかれたこと¹⁸⁾, また, 児童中心主義や新教育運動の影響もあり, 特に年少児の教員養成ではこの傾向が強かったという背景も作用したといえる¹⁹⁾。しかし, それだけでなく, 当時保育学校に通学していた幼児の実情に応じて求められたものであったことは否めないだろう。保育学校に通う幼児は, 年齢的に身体的な発達を保障されることが重要な時期であり, そのために子どもの発達や病気に関する知識が求められたといえる。そ

のうえ、当時の保育学校は貧困で共働きの家庭の子どもが通学していたため、栄養や衛生が不十分で慢性的な病気を抱える子どもが多かったことも起因していたと考えられる。

次に、社会問題、特に保育学校が所在する地域に見られる生活や労働に関する問題点を学習する科目が設けられていることである。例えば、ゴールドスミスカレッジでは、1919年の保育学校教員養成コースの設置に伴い、コース科目の中に、公施設としての保育学校の位置付けを明確にする学習として、社会科学という科目を提供した。ちなみにこれは、同年に他の段階の児童の教員養成にも必要な科目として保育学校コースとは別に開講されている。そしてその後、前記のカリキュラムにあるように、教員養成コースのすべての学生は、社会科学の授業を受けるようになっている。その具体的な内容は、実習校の多くが所在する近隣地域が抱えている問題や社会状況の把握、障害児（盲・聾、知的障害）、児童福祉（乳幼児死亡率の現状、保健官health visitorsの仕事、保育学校、両親教育）、学校医療サービスの仕事（調査権と義務、学校や学童の医療調査の目的と方法、教員の役割、医学的見地からの学校閉鎖と児童の排除）である。

このゴールドスミスカレッジは、マクミランの学校の影響から、こうした地域社会の状況を学ぶ科目をカリキュラムに入れたと考えられる。しかし、これはデットフォードという地域性によるものと結論づけることはできない。1931年に保育学校教員養成コースを設置したダーリントンカレッジのカリキュラムでは、カレッジの保育学校や、住居とスラム生活の問題点や町計画、貧困、熟練労働者や非熟練労働者、工場の青年たちの問題を学習する社会研究サークル（Social Study Circle）に重点をおいていた²⁰。

このことから、保育学校教員を養成するカレッジのカリキュラムは、地域社会の中で保育学校が担っていた役割に影響を受けていたことが指摘できる。特に、当時、保育学校の福祉的側面が強調され、貧困家庭の幼児のために保育学校が設置されることが強く求められていたため、そうした性格を理解し、幼児の生育状態や生活環境などを把握しながら保育を行える教員を養成する傾向にあったといえる。そして、そのために、保育学校や病院、関係施設などでの実習を積極的に行ったとも考えられるのである。

V ま と め

以上、1920年代のイギリス保育学校教員の養成を、カリキュラムを中心に捉えてきた。ここにみられる特質は、以下のとおりである。

① 経験・実習を重視していること。

保育学校協会の提案も、各養成校のカリキュラムも、学生に保育学校での実習はもちろんのこと、ほかに家庭や医療機関、児童福祉施設などでの実習や訪問を課していた。これは、当時教育院が教員養成において専門的な内容を重視したことや、新教育、児童中心主義といった考え方の普及などの影響も背景にあったと思われる。またそれだけでなく、保育学校が家庭や地域での生活環境を考慮しながら保育を行う必要がある年齢の幼児たちを対象にしていることも、実習が重視される理由の1つであろう。

② 保育学校に通学する幼児の状況にあわせた養成であったこと。

当時保育学校に通学していた幼児は、貧困家庭から来ていることがほとんどであった。そのため、

保育学校の教員は、そうした家庭の子どもや家庭の実状を知ることが求められていた。慢性的な病気をもち、食事や衛生が不十分なため発達不全である子どもを保育したり、母親に対する教育も行わなければならなかったため、教員は子どもをケアするための知識・技術を有することが期待されたのである。また、教員は地域社会に関心を持ち社会問題へも目を向けることにより、子どもが抱えている問題を総合的に判断することが求められたため、カリキュラムにおいてもそうした地域理解や労働運動などの内容を含む科目が提供されている。このように、保育学校の教員養成は、対象幼児の状況により保育学校が持たざるをえなかった福祉的な側面を反映したカリキュラムになっていた。

このようなカリキュラムにみられた特質から、保育学校の普及活動の方向性が読み取れる。すなわち、保育学校が1918年教育法で公教育施設として規定されたにも関わらず、その普及活動は福祉的な側面を優先したものとらざるをえなかったのではないかと推察できるのである。それは、保育学校の当時の実情を考えると当然のことであり、それに応じて教員を養成することが期待されたことから明らかであろう。こうした点が、保育学校の教育施設としての普及は他の教育施設よりも軽視され、なかなか進展しなかった一因となったといえるのである。

本論文では、保育学校教員養成にみられた特質から保育学校普及運動への影響を分析するまでにいたらなかった。今後の課題であると考え。

注および参考文献

- 1) Board of Education, 'Regulations for Nursery Schools', HMSO, 1919, pp.12- 13.
- 2) Board of Education, *Report of The Consultative Committee on Infant and Nursery Schools*, HMSO, 1933, p.43.
成田克矢『イギリス教育政策史研究』御茶の水書房, 1966年, 235- 236頁。
田口仁久『イギリス幼児教育史』明治図書, 1976年, 100頁。
- 3) H. C. Dent, *The Training of Teachers in England and Wales 1800- 1975*, Hodder and Stoughton, 1977, pp.108- 109.
- 4) 保育学校協会による保育学校普及活動については、拙著「イギリスにおける保育学校運動の展開——保育学校協会の活動を中心に——」『教育行政学研究第20号』を参照のこと。
- 5) Nursery School Association, 'Third Annual Report December' 1926, p.7. (以下, NSA)
- 6) The Times Educational Supplement, February 16, 1924.
- 7) NSA, 'Nursery School Education' 1927.
- 8) J. Lochhead, *The Education of Young Children in England*, AMS Press, 1972 (First edition 1932) によると、初版当時、保育学校教員を養成していたカレッジは5校であった。
マンチェスターのthe Mather Training College, ロンドンのGoldsmith's College とGipsy Hill Training College, ダラムのDarlington Training College, デットフォードのRachel McMillan Centreである。
- 9) NSA, 'Suggested Course of Training for Nursery School Teachers & Superintendents' 1926.
- 10) 1930年には、養成センターを発展させ、Rachel McMillan Training Collegeとなった。

- 11) E. Bradburn, *Margaret McMillan - Framework and Expansion of Nursery Education-*, Denholm House Press, 1976, pp.118- 120.
- 12) I. Forest, *Preschool Education - A Historical and Critical Study-*, The MacMillan Company, 1927, p.287.
- 13) E. Bradburn, op. cit., p.116.
- 14) Board of Education, *Report of the Consultative Committee on Infant and Nursery Schools*, HMSO, 1933, p.37.
- 15) H.C.Dent, op. cit., p.94.
- 16) University of London Goldsmiths' College, 'Prospectus of the Training Department, 1928-1929'.
ゴールドスミスカレッジには、この2年コースのほか、保育学校長の養成を意図した1年コースも設置されている。
- 17) J.Lochhead, op. cit., p.199.
- 18) H.C.Dent, op. cit., p.108.
- 19) R.J.W.Selleck, *English Primary Education and the Progressives, 1914- 1939*, Routledge & Kegan Paul, 1972, p.121.
- 20) H.C.Dent, op. cit., p.108.